

祭

私は、先年、アメリカ各地を旅行して、アメリカ人の生活がいかにも単調なのに驚きもし、その単調な生活に耐えられるアメリカ人の神経の太さに敬服もした覚えがある。アメリカ人の生活というのは例えば「活字」のようなものである。月、火、水、木、金の五日は、一生懸命に働いて、土、日の二日は大いに享樂する。五日間の勤勞は、後に続く二日を享樂するためのものである。しかしその享樂の仕方が、映画や演劇、ドライブ其の他であつてはたから見えていても、与えられた一定の時間を、どうして有効に享樂するかといふことが主眼になつていて、享樂そのものが、その国やその地方の、歴史や伝承と些して関りがなないように見える。「享樂經濟」といふことがどうも彼等の頭を支配しているように思われてならない。

日本の都会、特に大都會の近來の風習も、稍々アメリカに似かよつて來てるといえるが、それでも神田の明神様とか芝の清正公様とか吉原のオトリ様とかの祭典は、江戸古來の伝承を

今尚保ち続けている。尤もその色彩は、往時よりも余程褪色しては来ているにちがいないが。

農村になると、先ず、休日とか祭日とかいうものが、不規則にやってくる。旧正月の一、二、三日、七日、十五日、二月一日のももて、三月三月のお雛様、四月八日のねはん、五月五日の節句、六月七日の観音様、七月十五、六日のお盆という風に、極めて不規則にやってくる。又その祭日が、夫々違った意味や役割をもっている。そして又その享楽の形式が夫々に違っている。食前に揃える御馳走の種類も違ってくる。これを文字にたとえれば、不規則に書きなぐった「肉筆」の字のようなものだ。

私の各祭典に関する思い出も、その享楽の形式や、場面、御馳走や服装の種類その他等によつて夫々違ってくるので、尽きせぬ興味をそそる。政治がまつりごととして、氏神様の祭典にその起源をもっていると言われるが、農村社会から、この祭事を外したなら、それは極めてヒカラビタものになってしまうだろう。国粹主義や復古趣味が盛んに宣伝された時に、こつこつ祭事の保護助長についての論議や施策が行われたのを聞いたことがないが、祭事は今日に至るもみんなの力によつて保存されている。これは何としてもうれしいことだ。

郷里と大阪

私が大学二年在学中のことであつた。経済史の試験問題に「ランカシアと大阪」というのが出題された。申すまでもなく、ランカシアというのは、英国の機業地で東の大阪に対峙していた。私の大学の二年生頃は、恰も昭和九年であつたから、綿業に於て大阪が急速度でランカシアを凌駕し、世界に揺ぎない覇権を確立した頃であつた。問題のポイントは、何故このように大阪が克くランカシアを抑えることが出来たかという、経済史的原因を説明することであると思つた。そこで、私は主として日本の女工さんの勤勉と能力と低賃銀、そしてこれらの諸条件を支えていた不合理な日本農村社会の構造に言及して、優をいただいた記憶がある。

私の幼少年時代、私の郷里讃岐の農村には、鐘紡をはじめ、大小の紡績会社から女工、時には男工の募集の手が伸びてきていた。紡績会社と特約を結んで、その手先となつて募集の仲介をしている人もあつた。後で直接聞いた話だが、鐘紡の山田現副社長も、私の田舎を隅々までといて工員の募集に従事したことがあるそつである。かくて多くの子女が、田園から大阪に

続々と出稼ぎをしたものである。

これらの人々は、暫くする程に、見違えるように立派になって、休暇や事ある毎に郷里に帰つて来た。女の人は、色が白くなり、お化粧が上手になって、田舎の青年にとっては、全く魅力ある女性になっていた。男の人も、サツパリとした洋服を着こなして、一かどの青年紳士のように見えた。又これらの人は、父兄に対してそれ相当の仕送りをするものだから、工員の父兄は、生計難がそれ丈助かり、人によつては主家や附屬家を建て直すものさえ出てくる始末であつた。又この人達は、イギリスの職工さんより恐ろしく低い賃銀で何倍もの能率を上げつよく働いた。埃くさい不潔な工場が多かつたが、何の文句も言わないでよく働いた。かくて日本の紡績業はグングン伸びたのである。

ところが、その結果、気の毒な人も出てきた。病氣(といつても主として呼吸器疾患であるが)にかかつて、青白い顔をして田舎に帰つてきて、静養する人が見受けられるようになってきた。親達は、これ又一生懸命に子供の病気を治してやろうとして、家計をきりつめて、栄養を摂取させたりしていたものである。中には、もっと悪い病気に感染したり、都会で墮落したりして、哀れな末路になつた人も皆無ではなかつたようだ。

今でこそ、労働基準法とか、労働者災害補償法とかいう労働保護制度が確立されているが、当時の日本の労働界は、かかる労働保護立法に恵まれていなかった。病気になるたり、罹災した場合、大抵の場合、田舎に帰ってきたものである。又当時の百姓衆は、それを不思議とも不都合ともとらないで、当然のこととして、病める子女を自己の温い腕に迎えたものである。農村は、こういう人にとっての唯一のオアシスであり、悪く言えば掃き溜りでもあったわけである。

日本資本主義の歴史は、くすしくもこうした農村のもつ不合理な構造に、その発展の弾力を求めてきたわけである。その是非善悪の批判は、色々の角度からなされようが、これからの日本資本主義の復興や再建は、その当時のように、農村の不合理な地盤に依存することではなく、もっと新しい活路を逞しく開拓するよう努力しなければならないものと思う。

百姓・地主・商人

私が子供の頃には、大きい百姓家で、砂糖を栽培したり製造している家が多かった。夏に植えて、稲の刈入れや麦蒔がすんで木枯の吹く寒い頃、五、六尺にのびた砂糖キビを、掘って皮をむき、これを絞って炊いて固めて、黒い砂糖を作っていた。四斗樽に詰められた砂糖が、何本も庭先に並ぶ頃、商人が大きい天秤棒をかついでやってくる。四斗樽に詰められた砂糖を風袋込みで計るのである。天秤棒の端にかかった分銅が、十分上りきらない直前に、商人は分銅をつるした縄の根っこを巧みにひねって、何貫何百匁と宣告するのであった。

子供心に、私は、もう少しその分銅が上りつめて、上下の運動が静止したところを見て、公正にその重量を計ってもらいたいものだと考えたことが度々あった。スルイ奴だと思ったが、百姓衆はこれに何の抗議もしなかった。この砂糖の商売で、数力年の間に、巨万の富を蓄えた人が、私の村にも出来たのである。農村において買叩かれるということは、何も砂糖に限ったことではない。青田売買だとか、立毛売買のように、商人の金融力が加わってくると、問題は更に面倒になってくる。

ところが逆に、百姓衆は物を買うのが下手である。縁日商人の巧妙な舌に巻かれて、粗悪な品を割高に買わされる等ということは、商品に知識の乏しい百姓にとってよくあることである。商況に対する情報は今日では、新聞やラジオを通して、相当行き届いてはきているが、当時に於ては、極めて乏しいものであった。従つて商人にしてやられるということが、自然、多かたにちがいない。

肥料等は、大抵の場合、金融と結び付いていた。肥料商は、多くの場合、地主を兼ねていて、植付や種蒔用の肥料を百姓に供給してやった。そして出来秋になつてから、相当高歩の利子と併せて、年貢米の形や、保有米を売つた金でその「決済」をさせていた。又これ等の肥料商は、肥料を通しての金融の他に、療養費、教育費、冠婚葬祭費等の不時の費用も併せて金融していた。百姓衆はこの「旦那」に抑えられて、身動きも出来なくなつていたし、主従の關係に近い、隷屬關係がそこに形成され、維持されてもいたのである。

尤もかような地主を一概に非難するのは当たらない。地主金融の方式は、当時の農村にとつては、かけ替のない金融方式であつたし、地主の中には本当に親切な人々もいた。彼等は恩情を傾けて、輩下の百姓衆がそのなりわいを維持して行けるように、こまごまとした配慮を怠らな

いで、慈父のように敬慕されている方も少くはなかつた。

そして又その地主の家族も謙遜であり質素であつて、自ら率先して勤儉貯蓄の先達になつていた人も多かつた。水害が起きて、池塘や田地が流された場合に於ては、政府の力を俟つまでもなく、地主自ら相当の復旧費を支出してくれたりした。私の父は野々池という五十町ばかりを灌漑している水利組合の総代をしていたので、水利組合の大きい問題は、細大洩らさず、今井家や田中家という地主兼肥料商の「旦那」に報告し、その指示をうけたり援助を求めめるのを常としていたようである。

一粒の米が便所の踏板におちていても、自らそれを拾つて食べたという鳥取家の節儉ぶりや篤農ぶりは、そこら界限の人口に永く膾炙された美談となつていた。これ等の地主も、終戦後の農地解放の影響を受けて、今では見るかげもなく、落魄の運命を辿つている。農業土木の工事は、一切県庁や中央政府の役人の手に移つて、政府依存の度が高くなつてしまつた。この頃になつて、私はしみじみと地主の功罪を考えさせられている。

米の飯

「貧乏人は麦飯で我慢しなさい」と言つたといふので、それが当時の大蔵大臣池田勇人氏の放言問題として、ジャーナリズムが大きく取上げ、しまいには、この思想が恰も自由党の性格を物語るものだとされて、政治問題にまでなつてしまつたことがある。

池田さんの言われたことは、八千四百万人の国民がたらふく喰うだけの米は、この日本には生産されないし、不足分を海外から買つただけの外貨の余裕もないから、米が不足すれば麦で補いましょう、という経済の論理を言つたまでのことである。こんなことを一々取上げるジャーナリズムも政界も、見上げたものとして賞讃するわけには行かない。尤も私であれば、同じことを「八千四百万人の日本人が、たらふく米の飯が喰べられるようにすることが、そもそも政治の理想でございます」と言つてのけたでしよう。どうせ同じことをいうのであれば、ヴオキヤブラリーの選択に、ちよつと注意して欲しかったと、当時、同氏の秘書官だつた私は、池田さんのためにも自由党のためにも惜しみたい。

極貧であるわけでもなく、自分の田地で、一等米を作っていた私の家などでも、毎日たらふく米の飯を喰っていたわけではない。それどころか、米の飯を喰うのは、お正月とか冠婚葬祭の日とか病気のときとか、或は弁当をもつて行く場合等に限られて、それ以外の日は、米三割裸麦七割程度の飯を喰うのを例としていた。しかも、麦に混ぜられる米は、決して一等米ではなくて粉米の入った屑米であったわけである。時には、雑炊或は芋がゆで以て、米の消費を節約したものである。

当時の日本は、米産圏である朝鮮や台湾を領有していたので、それらの地域から内地への米の移入も多かった。しかも人口は六千数百万に過ぎなかったのに、中流農家の食事は、そのように貧しいものであった。家族全部が、毎日一応米の飯にありついている家は、八百軒の村人の中で、十指を以て数える程度のものであったろうと思う。申し忘れていたが、問題の池田さんのうちでも兄弟七人のうち、姉五人は麦の入った飯を喰べておられたそうである。しかも池田さんのうちは、広島県でも御自慢の家柄のよい名家であるし、酒の醸造家でもあるし、村で一、二を争う資産家でもあったのである。

当り前のことを言つて放言だと非難され、冷酷だと謗られるのが今日の政治であるとするならば、われわれは一体どうすればよいのであろう。寛容の徳というものは、人事百般にとつて大切な潤滑油であるが、今日の政治の在り方をみて、そのことが特に痛感される。ちよつとした言い廻しにも、トゲトゲした態度で応酬されるようになったとしたら、これはたまつたものではない。

麦飯問答にしても、この中にこもる当り前の経済の論理ぐらひは、一応はかみしめてもらいたいと思うのは、一人麦飯を喰つて育つた私一人の抗議ではあるまいと思う。